



プラチナ世代

宮西 史子
(香川)

コロナ禍の始まるるときし現れぬ三度目の癌あかねさす君

打ち明けしわれの病をおのが身に引き受くるごと逝きたり友は

QRコードを読まれケイタイの君のラインに取り込まれたり

ペイペイで支払ひすればたまに出すお札さつが木の葉のやうに見えたり

七十は浮世の外と言ひしはは浮世小路に迷へるわれは

咎め立てする何人なんびとも無きながら仏壇の戸かどを閉して出でゆく

散歩道ともに歩みし夫逝きて枝みち脇みち逸れてわが行く

日本画のなかより抜け出しころばへ持ちたる雉きが歩き始めつ

やがて事起りてつるぎ羽はおもひ羽はねあることを知るわが身の内に

生きものは単一のものひとりにはひとつの命好きに歩まむ

いちにんの知り尽せざる処女地あり地に落ちて知る桐の筒花

七十はプラチナ世代と郷ふるひろみ文藝春秋ぶんしゅんで言ふ言つてくれたり

仕合せのホルモン(ドーパミン) 出れば癌は小さくなると言はるる

相互扶助、手間がへ、結むすのありし里たすけ合ひして行かう行くべし

追はれゆくごとく追ひゆくにちにちのもう若くなし心せかるる

このごろの私

双眼鏡を首に提げ朝六時から四五千歩歩く。散歩の楽しみを教えてくれたのは夫だが今は一人。また誰かと歩くようになるか、歩けなくなるか先はわからない。歩けるまで歩き、詠めるまで詠みたい



影を探して

樋田 由美
(三重)

このごろの私
今私は、短歌がおもしろく
て仕方が無い。上手になつた
わけではない。唯、いろいろ
と吹っきたからだと思う。
私には私の短歌しか出来ない
それでいいと腹をくくつてし
まった。不遜だが楽しい。

糸杉のディスクトップに指止まる 死を自覚したゴツホを想い
優しさをもいつも探して貪むさばった僕は誰かにやさしかったか
厚切りのマイヤーレモンは酸っぱくて惚けた心に喝を入れられ
空を突くメタセコイアも忙しい 春の装い小鳥の相談
空井戸はキーコキーコと春の歌繰る人も無い釣瓶の心
傷付いたままで立ってる桜の木 枝にはほんのり紅さす蕾
「信じてる」不意に言われて戸惑った 自分自身がわからないのに
勢いで入ってしまった骨董屋探しているのは魔法のランプ
淋しげな犬の遠吠え聞きながら自販機で買う酒と焼き鳥
真闇まやみから僕を目掛けて降って来る光の欠片か髑髏の破片
時折に僕から離れていくアイツ ピーターパンのように探ささ
寝たままでジャズ聞きながら蘇える遠い昔の少年の時
踏みつけた軌条レールはひどく錆ついて白い小花が辺りに笑う
見上げてる桜は今年も鮮やかでひとひらふたひら影つれて散る
飛び立てる鳥は体をひと揺らし迷いを捨てて大空をゆく